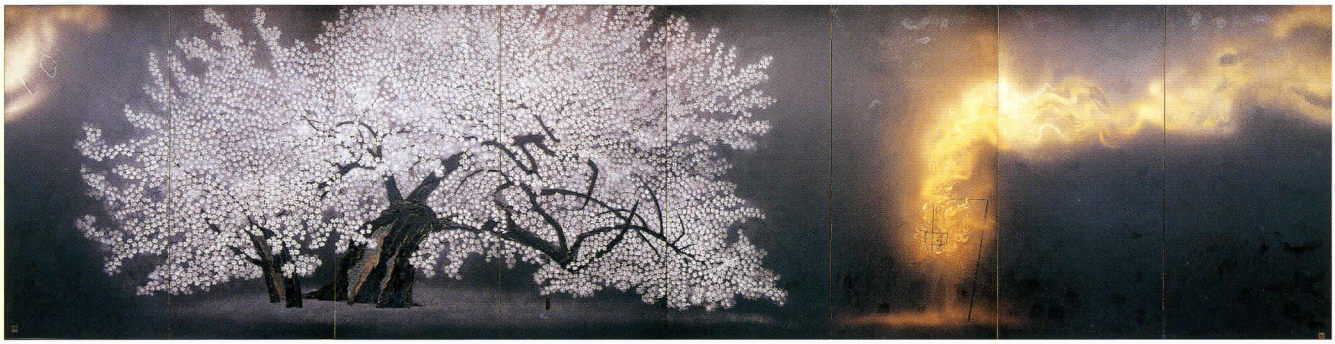
Civinote
しびのーと
19
高松市美術館
ボランティア通信
2009年4月15日発行

Gallery Talk 誌上 ギャラリートーク

01

加山又造展 会期 2009年4月17日(金)▸▸5月31日(日)



加山又造《夜桜》1982年 光記念館蔵（展示 4/17 ～ 5/10）

夜桜を見に、いらっしゃいませんか！暗闇に、燃える篝火(かがりび)に浮かび上がる満開の桜。屏風(四曲一双)の大画面に描かれた《夜桜》です。描いたのは、現代日本画を代表する画家の一人、加山又造(1927～2004)です。速水御舟が昭和4年に、安珍・清姫伝説で知られる道成寺で写生した花を付ける前の入相桜（いりもいざくら）の素描に想を得て、加山は、夜景に爛漫(らんまん)と咲き誇る桜花を篝火と共に描きました。篝火の炎は右へとたなびき、その先は循環し桜の左上に現れています。この入相桜は室戸台風で失われており、現在は若木が植えられています。加山も実物を見る事は出来なかったのですが、想像で咲かせた桜花は、神秘的で妖しい魅力を放っています。

加山又造は、昭和2年京都西陣に生まれます。父親は和装図案家で、幼児の頃から病弱だった加山は父の懐に抱かれ、白い紙に線を描き、色を付けていく父の手を見て育ち、筆が持てるようになると北斎漫画等を一日中写していました。幼い頃からの憧れであった大きな絵をいつか描きたい…そんな思いが屏風絵へと自然につながった、と加山は語っています。

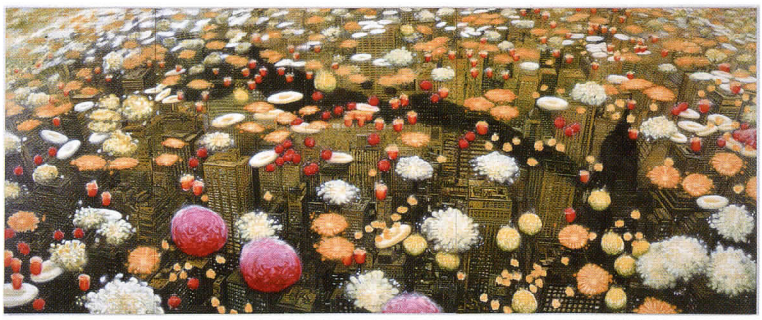
今回は、装飾的で華麗な屏風絵に加えて、裸婦シリーズ、水墨画シリーズ等、23点もの屏風作品がやって来ます。また初期の西洋絵画の影響をうかがわせる動物画シリーズのほか、版画やCG、そして生活の中にこそ美しい物をと考え取り組んだ着物や陶器の絵付け、洋食器やジュエリーのデザイン等も展示され、加山芸術の多彩な世界を一望することができます。常に新しい可能性に挑戦し、美を追い続けた「美の狩人」加山又造の世界をお楽しみください。（5月12日から一部展示作品の入替えがあります。）　［山上紹代］

02

大岩オスカール 夢みる世界展 会期 2009年7月24日(金)▸▸9月6日(日)

大岩オスカールって作家、ご存知ですか？もちろん！って方は別にして、そうでない方のためにここで簡単な紹介をしておきましょう。

大岩オスカールは、ブラジル移民として渡った両親のもと、1965年サンパウロで生まれました。子供の頃から絵を描いたり、物を作ったりするのが好きで、サンパウロ大学では建築、都市学を学ぶ一方、本格的に美術制作を開始します。91年、25歳の時日本に移住し、建築事務所で仕事をしながら制作を続け、2000年にアーティストとして独り立ちし、02年からはニューヨークに拠点を移し精力的に活動を続けています。



大岩オスカール《ガーデニング（マンハッタン）》2002年　東京国立近代美術館蔵　©Oscar Oiwa

ニューヨークに渡ってまもなく《ガーデニング》というシリーズを描き始めます。シリーズの最初に描かれた作品の一つが《ガーデニング(マンハッタン)》で、縦2・27m、横5・55mもある大作です。高層ビルが建ち並ぶマンハッタンを上から見たもので、空には赤や黄色の花がたくさん浮かんでいる美しい絵です。しかし、近づいてよく見てみると…それは花ではなく爆弾が炸裂したもので、戦争を表現しているのだそうです。

遠くから見るとスケール感と迫力に圧倒され、近づいていくと皮肉とユーモアに満ちた細部を発見する…それが大岩オスカールの魅力です。「僕は自分の視線で静かに世界を眺めるのが好き」と本人が語っているとおり、物事から離れたり近寄ったりしながら自分の目線で世界を見、思いもかけないイメージを組み合わせ、不思議な世界を提示して、私たちの想像力を刺激してくれます。夏休みには大岩オスカールの作品に会えますよ。どうぞ、お楽しみに！！　［槙井真由美］

civiの主な活動

2008.10月 ↓ 2009.3月

Activities

2008	10/24～12/7	A	「没後80年記念 佐伯祐三展」ギャラリートーク（開催回数のべ18回、参加者数のべ382名）※
	12/16	B	ナガレスタジオ見学
	12/24		ワークショップ「オリジナルのクリスマス飾りを作ろう！」（講師：美術家・あきやましんご氏）アシスタント
2009	1/4	C	「流政之展」オープニングにて
	1/4～2/8	D	「流政之展」ギャラリートーク（開催回数のべ5回、参加者数のべ117名）※
	2/15	E	ワークショップ「写真をつなげて大きな「ツギラマ」をつくろう！」（講師：美術家 写真家・糸崎公朗氏）アシスタント
	2/20～3/29		「オールドノリタケと懐かしの洋食器」展ギャラリートーク（開催回数のべ14回、参加者数のべ218名）※
	2/22，3/1	F	子どものアトリエvol.20「おなたの顔で福笑い！」「フシギなもの、ヘンなものをつくろう！」（講師：美術家・千葉尚実氏）アシスタント
	3/21		ワークショップ「鋳込みと一陳盛り オールドノリタケの技法を体験！」（講師：陶芸家・亀井洋一郎氏）アシスタント
	3/29		ワークショップ「ドローイングで遊ぼう！」（講師：美術家・名和晃平氏）アシスタント

※ギャラリートークは会期中の日曜・祝日、各午前・午後に開催（流政之展は午前のみ開催）

A 「佐伯祐三展」ギャラリートーク

本格的な画業は僅か5年。生き急ぐような激しい制作の日々に30歳という若さでパリで亡くなった。没後80年の今も熱烈なファンを持つ佐伯祐三に改めて驚かされました。「若い頃から大好きだったの。今日は、こんなに沢山の佐伯祐三に会えて幸せ。佐伯の作品を見て、パリに憧れていたのよ。」と、熱く語って下さった女性。遠い昔を思い出すようなその表情は少女の様でした。懐メロだけでなく絵画にも一瞬にしてタイムスリップさせる力があるのですね。幸福の御裾分けを頂いたGTでした。

［山上紹代］

B ナガレスタジオ見学

12月16日、当日は肌寒い日でしたが、私達 civi のメンバーは高松市庵治町にあるナガレスタジオを訪れました。庵治半島の東側真中にほど近い岬にあって下から見上げると周囲の大自然と重厚なレンガの建物とが調和して、まるで要塞のようで圧倒されました。アトリエに到着する前から期待に胸が膨みます。駐車場へはアシスタントの女性の方が出迎えてくださり山を背景にした流先生の住居兼スタジオへは入口から百メートル近く登って行った場所にあります。総面積はなんと一万坪もあるそうです。

流先生は、全国津々浦々を回られて後、瀬戸内海を見下ろすこの場所を選ばれたということです。ただし最初のお住まいは同じ庵治半島でも別の場所にあったそうで、後に日の出の見えるこの場所にこだわって移ってこられたそうです。登りきったところに広場があり、そこから瀬戸内海が一望できます。

広場には有名な「サキモリ」やその他の彫刻作品が展示されています。あいにくこの日先生は外出されていてお目にかかれませんでしたが、その代わり先生の手で命を吹き込まれた作品の数々に出会うことができました。この日、流作品の創造の場を訪れ、スタッフの方からいろんなエピソードを伺ったことで、美術館や街中で普段何気なく見慣れている作品のひとつひとつに対して、この日を境にまた違った見え方がするように思いました。

［湊　節代］

C 「流政之展」オープニングにて

「プリーズタッチ！彫刻はさわらないとわからない。」流政之展オープニングの日、作品を眺めている私達に流さんはこう声を掛けてきました。石で制作された作品はさわってもよいとのこと、でも普段美術館の作品はさわれないものです。「さわってもいいと言われてもなかなか手がでない」と私は流さんに言ってしまいました。次の瞬間気がつくと私の手は作品の上に。ためらう私をじれったく思ったのでしょうか、流さんは私の手をとって作品まで誘導してくださったようです。??実は私はこの瞬間をよく覚えていないのです。流さんの素敵な目に気を取られていたので！

さて、作品をさわる前、石の表面はひんやりと冷たい感じがすると思っていました。ところがさわってみると石に暖かみが感じられ、磨かれたところは「すべすべ」といった印象を受けました。そして表面はなめらかにゆるーくカーブしています。この流さんの作品の特徴であるカーブは端のほうになると鋭くなり、その鋭いラインは指先でなぞると瞬間、刀を思わせます。さわった感覚は、目で見た感覚とは違うものとなり、一段と深く私の記憶に残りました。

「手でさわることは手で見ること、目で見るは目でさわること。」（ナガレ造型口伝より）

［三好ひさこ］

D 「流政之展」ギャラリートーク

私にとって衝撃的だったオープニングの一週間後、ギャラリートークを担当しました。わずかな時間の中では流さんの人生を全て語ることはできず、なにせ85年という長い人生ですから…。流さんは、人と出会って彫刻を作り、彫刻を作ったことでまた人と出会い、という人生でその時々の出来事はまるで小説を読んでいるかのような不思議さ！おもしろさ！会場の作品の不思議なかたち、タイトルのおもしろさからも流さんの人生を読み取ってもらえたら、と思っていたのですが皆さんに伝わったでしょうか。

［三好ひさこ］

E ワークショップ「写真をつなげて大きな「ツギラマ」をつくろう！」アシスタント

写真家・糸崎公朗さんの作品は、街中のオモシロ不思議な風景を撮影したもの、昆虫を主人公にして撮影したもの、町の風景を撮影した写真を立体に組み立てたものなど、興味

▲佐伯祐三展ギャラリートーク。

▲流政之氏と手で鑑賞するシヴィメンバーら。

▲糸崎公朗ワークショップにて。お気に入り風景をハンティング中。

▲糸崎公朗ワークショップにて。ツギラマ中。

▲千葉尚実ワークショップにて。壁面に増殖した「キモカワ」顔。

civiが見た！
高松市美術館コレクション

Ay-O

靉嘔《アダムとイヴ》1967年
油彩・キャンバス 143.5×103×13cm

この絵を見た時、実際に虹を見た時のように、夢見るような豊かなゆったりとした気分になります。虹の画家と呼ばれる靉嘔（あいおう）の作品です。

靉嘔、珍しい名前ですネ。彼は1931年茨城県生まれ、本名を飯島孝雄といいます。50年に渡米し、日本とニューヨークを往来し活躍しています。すべての物体のイメージを虹で描く作品で人気を博し、71年のサンパウロビエンナーレはじめ各国際展で数多くの受賞をしています。

なぜ虹なのかというと、過去の芸術と決別した靉嘔にとって、画面になんらかの「線」や「形」を描く選択肢はなく、唯一残されている「色」そのものを描くようになったからです。作者はまた「虹を描くようになったのはすべての色彩を用いて絵を作ってみたかったからで、すべての色彩といえば虹があることに気づきレインボーの作品が始められた」とも述べています。

彼の名前の靉とは、雲のたなびくさま。嘔とは、慈愛のこもった歌声などの意味があります。靉嘔が虹色に染め上げるのは森羅万象に及び、作品がかもし出す雰囲気も静謐なものからエネルギッシュなものまで実に多彩ではありますが、そのいずれからも彼の名前のような「愛」が感じられます。第1期常設展「愛のかたち ピカソから村上隆まで」（6月5日～8月16日）では、《アダムとイヴ》ほか2点の靉嘔の作品が展示されます。ぜひ展示室で、靉嘔の愛に満ちた虹色の世界をお楽しみください。

［皆見礼子］

惹かれるものばかり。今回のワークショップでは糸崎さんが「ツギラマ」と命名した作品を作りました。この「ツギラマ」とは「ツギハギ＋パノラマ」の意味で、町を歩いて見つけたお気に入りの風景を一つの地点から断片的にたくさん撮影し、それらをツギハギしてパノラマ写真を作り上げるというもの。参加者は商店街や路地など美術館周辺で撮影をした後、美術館に戻り、ツギハギ作業をしました。初めはどうなるのかと思ったのですが、糸崎さんにチェックしてもらった上で、写真をプリントし、個々にツギハギをしていくと、うまくつながってもつながらなくても、それなりに面白い作品になりました。ツギハギをして足りない部分は、絵を描いたり、全く関係のない写真をコラージュしてみたり個性の光る作品の数々が完成しました。普段見慣れている風景ががらっと違って見えたり、思いもかけない不思議なものが見つかったりと、刺激に満ちたワークショップでした。

［森糸江里子］

F 子どものアトリエ vol.20 「おなたの顔で福笑い！」アシスタント

冒頭で、昨年「こんぴらアート2008」にも出品していたヘンなおじさん（!?）の段ボール人形を何点か見せていただきました。「キモ・カワ」なおじさんは子どもたちのハートをしっかりゲット！先生は、キモ・カワおじさんとは反対に可愛い女性でした。今回のアトリエでは、いろんなサイズの丸く切った段ボールに色をつけたり、色紙を貼ったりして下地をつくり、用意してあった顔のパーツ写真（目・鼻・口）や、当日撮影した自分の「変顔」を切り取ったパーツを貼り付けていきました。実物大より大きくプリントされたパーツは、充血した目、毛穴の開いた鼻、しわの多い唇など、並べて置いてあると怖いものがあります。しかしそれらを組み合わせる段になると、子どもたちはさらに怖い形相作りに励んだりと、とても楽しそう。不思議な顔、不気味な顔、楽しい顔、可愛い顔、面白い顔…福笑いで作ったたくさんの顔は、完成後壁に張り出され、遠くから見るとカラフルできれい、でも近づくとちょっと不気味な、ユニークな空間が作り出されました。

［森糸江里子］

Workshop

2つのワークショップから

亀井洋一郎と名和晃平

2009年の2・3月の高松市美術館は、毎週末なにかやっているというくらいに、イベントが目白押しであった。そのうち、糸崎さん、千葉さんのワークショップについては、シヴィメンバーが当しびのーと誌上で報告しているので、私が担当したそれ以外の2つのワークショップについて報告しておきたい。

一つは3月21日（土）に開催した「亀井洋一郎ワークショップ 鋳込みと一陳盛り」。亀井さんは香川県東かがわ市にアトリエを構え、石膏型に液状の土を流し込み成形する鋳込みの手法を用いて、一見シンプルな、しかし複雑な構造をもつ磁器作品を制作している。

今回のプログラムは、同時期に開催中の「オールドノリタケと懐かしの洋食器」展に関連させて、オールドノリタケで用いられている2つの技法「鋳込み」と「一陳盛り」を体験するという興味深いもの。亀井さんはまず「鋳込み」でつくった一辺5㎝位の立方体の素地（普段亀井さんが作品制作で使うのと同じもの）をたくさん用意し、参加者はそれらを3つ組み合わせ、凸型、L型、I型のいずれかの形を作る。次にその表面にチューブから搾り出した土でおのおのが好きな文様や絵を描いていく。作品はこのあと素焼き・施釉・本焼き（これらの過程は塩江美術館の陶芸施設にて実施）の長い過程を経て完成となる。柔らかな土の感触を手で感じながら作品作りを楽しんだ参加者の皆さんは、固く光沢を帯び「白亜のオブジェ」へと成長して手許へと帰る我が子の姿を見て、いかなる感慨を抱くのであろうか…。

もう一つは3月29日（日）に開催した「名和晃平ワークショップ ドローイングで遊ぼう！」。名和さんは国内外で活躍し近年急速に評価が上がる気鋭の美術家（1週間くらい前も個展でドイツに滞在しておられた）。制作に入る前にまずご自身が取り組んでいる7つ程度のテーマ（制作スタイル）をスライドで説明。当館が所蔵している分光シートを用いたアクリルボックスの作品をはじめ、様々な魅力的な作品が紹介され、アーティスト名和の創造の多様さと、恐るべき質の高さに驚かされた。参加者の大半は小学生であったが（名和さんが噛み砕いて話してくださったことにもよるが）、そわそわすることもなく金縛りにあったかのように（！）、1時間に及ぶ名和さんの話と映像に引き込まれていた。

この日の制作プログラムは、「ユポ」という撥水性の紙に、アクリル絵具・木工ボンド・シャボン玉の液をブレンドした塗料で絵を描くというもの。参加者にはこれらの材料と、筆代わりに使う割り箸・ストロー・綿棒が渡されたが、名和さんからは「塗料のブレンドの割合、画材の使い方は自分で考えてください」と言われ、各自試行錯誤しながら、未知の素材と手法によるドローイング（線描）を楽しんだ。ストローでぶくぶくと泡立てる人、たっぷりと絵具を溜め、池のようなものを作る人、ひたすら綿棒で小さな丸の集合を描く人…講座室には普段の絵画の制作では絶対に見られないような奇妙な風景が繰り広げられ、さながらパフォーマンスのようであった。

名和さんは最後に参加者と一緒に多彩な完成作品を鑑賞し、「作品のレベルの高さに驚いている。子どもと大人の作品の区別がつかないのが面白い」と感想を述べていた。制作の時間は2時間と、これまた子どもには少々長いとも思われたが、シーンと静まり返った中、子どもも大人も終了の時間が来ても手を止めようとせず、静かに未知の素材との格闘を楽しんでいたのが印象的であった。

［高松市美術館学芸員 牧野裕二］

▲亀井洋一郎ワークショップにて。

▲名和晃平ワークショップにて。

伊藤存さんとのメールインタビュー

美術、文学、ダンスなど様々な分野で活躍する10人のクリエイターが先鋭的なトークやパフォーマンスを披露した「開館20周年記念トーク＆アクト」（2009年3月14・15・21・22日に6回実施）。その中で、釣りとアートの融合を探求する異色ユニット「フィッシング・ダイアリー」の一員として来館された伊藤存さんに、当館所蔵の存さんの作品などについてお聞きした。イベントの翌日、常設展示室でご自身のスケッチ作品のレイアウトをしていただいた存さんに、インタビューを申し出たところ、お疲れの為か「脳が死んでいるので、後日メールでお答えします」とのご返答があり、メールインタビューが実現した。お忙しい中、丁寧に答えてくださった存さんに感謝します。以下、ノーカットで掲載します。

［高松市美術館学芸員 牧野裕二］

▲伊藤存さん（後列左）と陽気なフィッシングダイアリーメンバーら。

牧野（以下、牧）：いつから、なぜ、刺繍で表現するようになったのですか？

伊藤存（以下、存）：刺繍を自分の表現としてはじめたのは1999年からです。一度アクリルのペインティングを制作したのですが、筆で描くことによって自ずと出てくる表現力をどうしたらいいのかわかりませんでした。それは、絵画の豊かさみたいなものに繋がっていくんだろうと今では受け止めることが出来ますが、当時はポイントがぶれていくように思えたので、自分の手を下したところをはっきりさせる為に刺繍で描くことにしました。

刺繍にかんしては、学校の時にペン画、スケッチ、切り絵…など様々な手段で描かれたものを一冊の本にするという作品を作ったのですが、その中の一つとして刺繍もありました。その時得た感覚があったので刺繍という手段に結びつきました。

牧：高松市美術館所蔵「森」についてお聞きかせください。いつごろの制作で、制作に要した時間はどれくらいでしょうか？

存：はっきり把握していませんが2ヶ月位だと思います。制作年は2006年です。

牧：かなり抽象的な印象を受けますが、一方で木々に見えたりと具象的に感じられる部分もあります。何を表現されたのでしょうか？

存：作品を仕上げる時の「仕上げる」というところに引っかかりがありました。そこに見え隠れする微妙な支配的な意識がどうしても気になりました。色んな可能性を淘汰した結果、作品が出来上がるという事は逃れようもないことですし、またそういったことを通過しないと出来上がらないのも事実です。しかし、AかBかどっちかしかない、という風に進んでいく二者択一的などうしようもなさを自分の制作に持ち込みたくないと感じたので、なにか糸口は無いかなと考えていました。

森というモチーフを選んだのは、意識次第で様々な見え方をするということが以前から気になっていました。例えば、木という事で言えば杉を追えば杉が中心に見えてきますし、クヌギを追えばクヌギが中心になります。この感覚を作品制作に活かせないかなと思いました。ただ、クヌギだけをすくいとって表現するのであれば、そこに微妙な支配感がでてきます。かといって全ての構成物を写し取るというのも、厳密に言えば不可能ですし、刺繍ではそれに「絶対に」が付くくらいです。こんなことを考えていた時に、ルービックキューブのことを思い出しました。例えば、白を揃えたら後の5面はバラバラの色の組み合わせが出来ます。次に緑を揃えたら、白は分解されて残りの5面に分散していきます。

刺繍は動かないのでルービックキューブのような現象は起きないにしても、それを作る時も見るときも、視点は動くので、人の意識次第で色々な見え方をするものを意識的に作ることは出来ると思いました。具体的には、たとえば木の個別のエリアを作らず、同時に隣の木の一部でもあるように描いていきました。それによって生じる、描いているときの感覚も意識と無意識を同時に引き受けるようなものがあり面白かったです。

牧：この作品を制作する上で苦労したことなど、エピソードがありましたらお教えください。

存：筆のように滲みや擦れといったことが起こる偶然性がない刺繍をしていたから、よけいに作品作りのもつ支配的な部分に近かったのだとおもいます。そして、それを同じ刺繍という手段で克服することにしたのでかなり意識しないといけませんでした。

▲スケッチ作品のレイアウトをする存さん。背後に見えるのは《森》。

牧：高松市美術館所蔵「スケッチ」についてお聞かせください。伊藤さんにとってスケッチとはどのような存在でしょうか？

存：かなり昔（子供時分）から今と同じような気分でやっているので、ドローイングとかいう言い方はなんかしっくりこないので、スケッチというふうに呼んでいます。子供のときは「絵」と呼んでいて、学校の図工とは別物と思ってました。

頭に浮かぶイメージを描きとめるもの？刺繍作品の準備の為？とくにこれといった定義はありませんが、最近は刺繍を始める前にとくに集中して描く事が多いです。刺繍の下絵というわけでもなく、あまり関係のないものも沢山描きます、スポーツの準備運動みたいなものです。高松市美術館にあるスケッチは色々な時に描いたものが混ざっていますが、集まった時に面白い関係になると思ったものを選んでいます。それと、スケッチはその時持っていた画材で描くので中には日が経つと薄くなってしまうものがあるので、美術館にあるスケッチはその可能性のあるものは省いています。

牧：どのようなときにスケッチをするのですか？1枚を描く所要時間は？

存：刺繍と比べて一番違うのは所要時間です。短くて一分くらい、長くても一日かかりません。わりと日常的に、紙とボールペンとがあればどこでも出来ます。

牧：スケッチについて、苦労したことなど、エピソードがありましたらお教えください。

存：描く事に苦労はしていないですが、展示が難しいです。作品にするというプロセスのないものなので人に見せるということを考えたら、どうやって見せるかということに気を使います。

牧：存さんにとって、「美術」の存在理由とは何でしょうか？（何の為に作るのか、何の役に立つのか、など）

存：美術作品を見たときだけに限らず、こちらの意識次第ですが身の回りにも心を動かされるものや、ものの見方がかわる瞬間というのはあります。そういうとわざわざ美術というものは必要ないとおもえますが、見に出かける「美術」が僕にとって大事なところは、その作品のむこうにそれを作った人がいるという事です。

牧：これまでの作風の変遷、今後の展望などお聞かせください。

存：作る意識の変遷ということで言うと、大雑把になりますが、最初のころはギターとかの楽器でいうコードを作っている感じで、その後に複数のコードでなんかやってみて、最近はドレミファ…で分けるのはちょっとなあ、とやっと気付いた感じです。

牧：3度目？の高松の印象はいかがですか？滞在中に見た光景で、今後作品に表れてきそうなイメージに遭遇したりされましたか？

存：昼間は美術館に居ましたし、夜は居酒屋でしたので何とも言えないですが、屋島は一度行ってみたいです。そういえば、夜のラーメン屋さんでタコ漁師のおじいさんがいたのですが、たまらない人物でした。

牧：その他、最近気になることなどありましたら、お教えください。

存：僕の住んでいる京都の食糧自給率がかなり低い事。

牧：お忙しい中、ご丁寧にお答えくださり、ありがとうございました。

ご案内

私たちと鑑賞をご一緒しませんか？

美術館ボランティア「civi（シヴィ）」によるギャラリートークは特別展会期中の毎日曜日および祝日の午前11時～、午後2時～の1日2回、2階展示室にて行います。

発行：高松市美術館　編集：civi ＆ 牧野裕二（高松市美術館）
デザイン：福井裕子（高松市美術館）

高松市美術館　〒760-0027 香川県高松市紺屋町10−4
Tel: 087-823-1711　Fax: 087-851-7250

編集後記

■100年に一度という経済危機の中、せめてひと時でも美術館で心豊かな時間を過ごしていただければと思います。［槙井真由美］

■何をしても不器用な私はいつも都合のよいことばかり選んで逃げてしまうことが多いのですが、「継続は力なり」を目標にして今続けていることを頑張りたいと思っています。［湊節代］

■日本には四季折々の美しい習慣があります。桃の節句に因んで紙粘土と和紙でお雛さまを作りながら春の訪れを感じました。［皆見礼子］

■流展関連イベントのお茶会に参加。エントランスのナガレバチを鑑賞しながらお茶を頂きました。［三好ひさこ］

■こどもたちの創造力に脱帽です。一緒に楽しむと、若返るような気が…するだけ!?［森糸江里子］

■「佐伯祐三展」はパリの香りがプンプン。パリには、大小合わせて60もの美術館があるとか、何時かロングステイで美術館三昧したいものです。［山上紹代］

■2009年は年明けすぐの流政之展に始まり、様々なアーティストによるワークショップ、トークショー、パフォーマンスなど、美術館はとても賑やかでした。美術館で受けた感動や驚きや戸惑いが糧となって、10年後、20年後に面白いアーティストが出てきたりなどしたら面白いですね。その時は、ぜひ「あの時刺激を受けた者です！」と名乗り出てくださいね。［高松市美術館学芸員 牧野裕二］